



TITLE:

東アジア・東南アジアにおけるインターネットカフェの比較社会学(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

平田, 知久

CITATION:

平田, 知久. 東アジア・東南アジアにおけるインターネットカフェの比較社会学. 京都大学, 2017, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13105>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2018-03-22に公開

(続紙1)

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	平田知久
論文題目	東アジア・東南アジアにおけるインターネットカフェの比較社会学		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文の目的は、東アジアと東南アジアの都市圏のインターネットカフェ（以下、ICと略記）に関するフィールドワーク・インタビュー調査、さらに各国・各地域のICに関わる研究・報道資料や法令等をもとに、インターネット利用の実態を明らかにし、もって現代のインターネット利用のあり方に関する課題とその解決のための指針を示すことにある。</p> <p>まず、序章では、アジア各国・各地域のICとそれを利用する「移動する人々」に着目する意義、およびそれらに対する比較社会的な観点からの分析の意義が、現代メディアに関する既存のアプローチとの差異として示される。</p> <p>日本（東京）のICを主題とする第1章で、移動する人々として論じられるのは「ネットカフェ難民」と呼ばれる人々であり、彼ら／彼女らのIC利用のあり方が、PCやインターネットの「好きなことが何でもできる」という理念が転写されたような空間である「個別ブース」を備えたICの利用様態の成立とその展開の過程として考察される。そして、このような人々は、個別ブースをまさに個室とせざるをえず、それゆえにICの中で、「他人に迷惑をかけない」という（暗黙の）規範に——自らをさらに苦境に追い込む可能性があるとも——準拠せざるをえない状況が示される。</p> <p>韓国（ソウル）のICを主題とする第2章で、移動する人々として論じられるのは、「公務員試験の合格を目指す地方出身の予備校生」である。彼ら／彼女らは、ソウルへの中央志向とグローバル化のうちにある韓国社会でこのような試験に励み、そのときICは息抜き場として利用される。このような人々を念頭に置くときに、社会的資本としてのゲームという娯楽は、どのように人々に分配されるべきか、という課題が示される。</p> <p>中国（北京、天津、上海）のICを主題とする第3章で、移動する人々として論じられるのは「当該都市の戸籍を持たない人々」である。「農民工」に代表されるそのような人々にとって、ICはPC・インターネット環境を提供する重要な場所であると考えられる。人々の移動の自由が徐々に認められる方向に進む現代中国において、ICは大都市へと移動する人々にとって、そこでしか得ることができない娯楽が提供される唯一の場所であり、娯楽はどのように提供されるべきか、という問題が現在の中国における喫緊の課題であることが論じられる。</p> <p>台湾（台北）のICを主題とする第4章で、移動する人々として論じられるのは「コミュニティー」と「フィリピン系家事労働者」である。彼ら／彼女らは、郊外化し、様々な制約を受けつつも社会の中で一定の位置を占める台北のICを、時間的／空間的に表立って現れないようなかたちで利用することが明らかにされる。その上で、特に人々の移動と強く関係するサービスとして、「ICに子どもを預ける」という実践について、その是非を問わざるをえない台湾の社会背景が考察される。</p> <p>香港のICを主題とする第5章で、移動する人々として論じられるのは、「フィリピン系家事労働者」と「インドネシア系家事労働者」である。彼女たちは自国に残してきた家族や友人と、安価に連絡を取り合うためにICを利用する。ただし、フィリピン系家事労働者とインドネシア系家事労働者は、それぞれの社会的・文化的背景に即するかたちで、香港のICをあたかも分け合うかのように利用しており、そのような利用のあり方が、ICにおける様々なサービスのあり方とも連続性を持っていることが示される。</p>			

シンガポールのICを主題とする第6章で、移動する人々として論じられるのは、「中華系移民労働者」、「インド系移民労働者」そして「フィリピン人系家事労働者」である。彼ら／彼女らは、それぞれの民族が集まる移民街のICを利用しており、そのようなIC利用のあり方は、公営住宅に暮らすシンガポール住民からは「見えない」かたちになっていることが示される。これらのことから、シンガポールにおけるICは、シンガポール住民と移動する人々との間の分断が生じる可能性を示す場所となっており、民族統合の理念を掲げる同国はこのような課題を捉える必要があることが論じられる。

フィリピン（マニラ）のICを主題とする第7章で、移動する人々として論じられるのは、「多数のフィリピン人」である。同国の英語普及率の高さや労働環境の悪さなどの社会的条件は、多くのフィリピン人を海外へと送り出し、ICはそのような人々とその家族や友人たちが連絡を取り合う場所として存在している。他方で、フィリピン人が海外への出稼ぎ労働によって得た貯蓄を用いて、家業としてICを開店することもあり、そのときICを開店した元出稼ぎ労働者たちは、人々にPCやインターネット環境を提供する者として、家族や周囲の人々の「保護者」のような役割を担うことになることが論じられる。

タイ（バンコク）のICを主題とする第8章で、移動する人々として論じられるのは、「タイの地方からバンコクに出てきた者」と「観光客」である。バンコクの内部にある格差、およびバンコクと地方都市の間の格差の実態が示され、そのような格差を埋めるものとしてICが存在することが論じられる。また、歓楽街でバーガールとして生計を立てる女性たちのIC利用のあり方と、彼女たちに提供されているサービスが確認され、貧困により満足な教育を受けることができず、また、現代メディア技術を利用するスキルがそれほど高くない彼女たちのメディア利用のあり方は、用いられるメディア技術が手紙からPC・インターネットに移行した現在も、過去とほとんど変化していないことが示される。

第9章では、各国におけるICの利用のあり方が「移動」、「娯楽」、「ケア」、「メディア」という4つの主題から比較され、それぞれの主題と日本のICにおける「ネットカフェ難民」問題との関係が論じられる。

帰結としての終章では、この問題の解決の指針として、J.デリダの「歓待」論を手がかりに、「歓待」という実践の検討がなされる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、東アジア・東南アジアの都市圏のインターネットカフェ（以下、ICと略記）に関するフィールドワークとインタビュー調査等に基づき、インターネット利用の実態を比較社会的視点から明らかにし、もって現代のインターネット利用のあり方に関する課題とその解決のための指針を示すことを目的としたものである。

本論文の学術的意義は、主として下記の3点にまとめることができる。

第1に、ICという場所に注目することによって、現代のグローバル化した情報社会における基本的問題としてのデジタルディバイド（情報格差）の多様な実相に迫り、さらに各地域においてデジタルディバイド問題が解消されてゆく様態を、実証的に明らかにすることに成功している点である。デジタルディバイド問題は、21世紀初頭の現在、欧米や日本など、いわゆる情報先進国の内部においては、すでに解消されつつある問題として捉えられることが多い。しかし世界的にみれば、インターネット普及率に代表される情報技術の普及レベルには、国家・地域間、あるいは国家・地域内に、依然として非常に大きな格差が存在している。そして、本論文第1章で数量的データに基づいて詳述されているとおり、東アジア・東南アジアは、情報技術の普及レベルの国内外の格差において、いわば世界の縮図ともいふべき位置にある。さらに、とりわけ普及レベルの低い国や地域においては家庭よりもICが中心的なインターネット利用の場になっていることから、東アジア・東南アジアのICは、デジタルディバイドがいかにして解消されてゆくかを比較社会的に解明していくための最適なフィールドであると言える。このことへの着眼は先行研究にほとんど例がなく、本論文の学術的オリジナリティの高さを示すものである。

第2に、研究方法として、東アジア・東南アジアの8つの国・地域、12の都市というきわめて広範なフィールドにおいて、2008年から2012年という長期間にわたる綿密なフィールドワークを実施することにより、質的・量的にきわめて厚みのあるデータを獲得・蓄積している点である。その結果として、各地域におけるIC利用の多様な様相が非常に具体的に明らかになり、またそれらを一望し比較対照することが可能となっている。とりわけIC利用の主体としての「移動する人々」に着目することで、それぞれの社会における格差やエスニシティの分断、あるいは親密圏の再編成といった個々の問題の様相が、インターネット利用とどのように関係しあっているかが明瞭に浮き彫りとなっている。その意味で、ICという場所が、現実社会とインターネット空間との結節点としてどのように機能しているかを、本論文は比較社会的視点から解明したとも言える。

第3に、ICという場所を媒介としたデジタルディバイドの解消の方向性が、終章でJ.デリダの「歓待」論を手掛かりとして、理念的・理論的に示されている点である。この点は、第1章で指摘された日本（東京）に固有の状況、すなわち、「ネットカフェ難民」による個別ブースでのIC利用に象徴的にみられるように、個人間の軋轢を徹底的に回避し、分断と排除を強化するような個人化志向の強まりという問題に対して、解決の方向性を示唆するものともなっている。このような日本の個人化したIC利用と比較対照することで、東アジア・東南アジア諸国でのIC利用、たとえば台北や香港でみられたような「子どものケアの場」としてのIC利用の様相は、ICにおける新たな親密圏の形成という意味で、「歓待」の実践的可能性を示唆するものとして解釈することができる。

以上のように、本論文は専門的かつ独創的な高い価値を有しているが、他方で、下記2点の課題の存在も指摘される。

第1に、上述の学術的意義、とくに第3点の裏面として、各都市のICのフィールドワークによる具体的で厚みのある記述の集積と、終章で「歓待」論によって示される理論的・理念的方向性とのあいだに、かなり大きな抽象度の落差があり、その間を媒介・架橋するような、もう少し抽象度を下げた問題設定あるいは理論枠組が必要だったのではないか、という点である。そのような問題設定あるいは理論枠組が十分に導入されていれば、本論文は、比較社会学的研究として、より強固な体系性と完成度をもつものとなったと考えられる。

第2に、第1章で本論文の射程外の問題として言及されているが、現代においては周知のように、インターネット利用の方法が、PCからスマートフォンなどのモバイル・ブロードバンド端末へと急速に移行しつつある。この事実を考慮すれば、本論文で扱われた問題は、近い将来、モバイル・ブロードバンド端末によって取って代わられるであろうICという過渡期の存在の問題であり、その意味で歴史的制約性をもつものとも言える。スマートフォン等による、場所を必要としない形態のメディア利用と、場所を必要としたメディア利用との過渡的な形態としてのICという位置づけを、より意図的・自覚的に記述すべきであったのではないかと考えられる。

以上のように、本論文には上記2点の課題の存在が指摘されるものの、これらの課題の解明は、むしろ学位申請者の今後の研究の発展に期すべきものであり、先述した、本論文の有する高い専門的・独創的価値そのものを減じるものではない。とくに第2点に関しては、本論文は情報技術を通じて再編されていく現代社会の、まさに過渡期を扱った研究であるがゆえに、歴史的な記録として固有の価値を有するとも考えられる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年2月7日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：平成 年 月 日以降